

ディスカッション

2001年7月16日東部中会教師会

質問者 A :

「マルクス主義における『地上の生』の高い評価の不徹底に対するファン・ルーラーの批判、という部分に興味をひかれた。ファン・ルーラーは、マルクス主義とキリスト教の違いをどのあたりに見ていたと思うか」。

関口 :

「最も大きな違いと見ていたのは罪の問題である。マルクス主義は、罪の解決という次元を抜きに、世界の完成を語ろうとする。しかしキリスト教、というかファン・ルーラーは、罪の解決なしには世界は完成しない。世界の完成の前に、回心と救いが必要だ、と語る。しかし、マルクス主義の人々は、神も仏もへったくれもないところで、自動的にプロレタリアート独裁の理想世界が完成する、と信じている。ここに最も大きな違いがあると思われる」。

質問者 B :

「とても面白かった。終末論の事柄とも関わるので、たいへん参考になった。わたしもぜひファン・ルーラーを読んでみたいと思った。ところで、ファン・ルーラーと、オランダ改革派神学者のバーフィンク、ベルカワーとの関係は、どういうものか。また、ファン・ルーラーのカイパー批判の論点は、ごく短く言えば、どういうものであるか」

関口 :

「バーフィンクに対しては、高い肯定的な評価があると思う。ファン・ルーラーは『啓示の哲学』の必要性をバーフィンクの名前を挙げて訴えているし、R G G 第三版の「バーフィンク」の項目の執筆者は、ファン・ルーラーであったりする。ベルカワーとの関係については、はっきりしたことは言えないが、わたしの印象では、あまり仲良くなかったように思う。ベルカワーの書物の中に、重箱の隅を突つくようなファン・ルーラー批判を見かけたことがある。原因ははっきり分らないが、年齢が近いこと、教派が違うことなどで、小競り合いがあったのではないかと推測される。でも、ファン・ルーラーのデータを見ていると、アム

ステルダム自由大学で行われた講演なども結構多く、そのあたりはどういう事情なのか、わたし自身も興味を持っている。カイパー批判については、二つくらいのことが言えると思う。まず第一に、NHK内部にGKN離脱そのものを批判し続ける線があり、その線をファン・ルーラーが受け継いでいること。カイパーと直接激突して自由大学を追われたと伝えられる倫理学者フードマーカの弟子がハイチェマ。そのハイチェマの弟子がファン・ルーラーである。第二に内容面であるが、ファン・ルーラーは、カイパーの一般恩恵論を批判した。特殊恩恵の優位性を強調するあまり、つまり一般恩恵と特殊恩恵との区別を強調するあまり、『キリスト教的』を言いすぎる結果を生み出し、この世界の中に、一般社会とは全く区別されたゲッターのようなものを作っていくことの危険性がある、というあたりを批判したようだ」。

質問者C：

「ファン・ルーラーが受け継いだと言われる『体験主義の伝統』は、『敬虔主義』と同じだろうか」。

関口：

「そう言えると思う。現在調べが付いているところでは、ファン・ルーラーが受け継いだ『体験主義』は、オランダに起こった第二次宗教改革の伝統を引き継ぐものだ、と言われていた。ものの本によると、その伝統は、「火を見つめながら、三位一体の神を瞑想する伝統」であると紹介されていた」。

質問者D：

「いろいろ問題を感じながら聞いていた。総じて思うことは、こんな理屈は、オランダというキリスト教の伝統を豊かに引き継いだ文化国家の中で、お勉強がよくできる学者さんだから、語りうることだ。たとえば、三位一体論から見た『世界は不必要』という話は、存在論の理屈なら、そう言えるかもしれないが、そんな理屈を使って、日本の中で伝道はできない。『世界は必要である』ということをもっと語るべきではないか。またファン・ルーラーが言っていることが、地上の生を喜んでそのまま受け入れなさい、というような話だとすれば、たとえば障害者の人にとって、どれくらい耐えうる言葉であろうか。『遊び』だなんだ、という部分も、オランダの中では語れるかもしれないが、日本では、とてもじゃないが、受け入れられない。現実に、人生の苦しみを感じている人の耳には、届かない」。

関口：

「なるほど、ごもっとも、と感じるところがある。これからいろいろ考えてみたい。ただ、ファン・ルーラーの時代のオランダの状況は、カイパーの時代などから比べると、世俗化がずっと進んでしまっていたと言っている。その中でファン・ルーラーは、世俗化に対して肯定的な立場をとっている。彼自身、労働者の家庭で育ったり、政治やら何やらに手を伸ばしていたことなどもあってか、私がファン・ルーラーの書物を読んでいる印象では、『お高くとまっている』ような人ではなかったように感じている。だから、お勉強ができる学者さん云々の部分は、ちょっと違うのではないかと、思う」。

質問者 E：

「ファン・ルーラーが『遊び』を語るのは、何の影響か。また、アウグスティヌスの *frui Dei* と *uti mundo* の区別について、ファン・ルーラーが批判しているようだが、その批判は当たっていないのではないかと。ファン・ルーラーはアウグスティヌスを読み違えているのではないかと。カルヴァンの *theorum gloriae Dei* のほうは肯定し、アウグスティヌスのほうは否定する、ということは、アウグスティヌスとカルヴァンを対立的に捉えているということか。それは違うのではないかと」。

関口：

「はっきりとしたことは言えないが、ファン・ルーラーの『遊び』はやはりホイジンガの影響抜きには考えられない。しかし、神学の世界で『遊び』という言葉が採用されはじめたことにおいて、ファン・ルーラーは、草分け的存在ではないだろうか。モルトマンやコックスは、ファン・ルーラーよりずっと後。いや、モルトマンの場合、ファン・ルーラーからの剽窃である可能性が高い、と考えている人々がいる。また、ファン・ルーラーのアウグスティヌス批判については、今日のところは、ファン・ルーラーの言っていることを紹介したまで。ファン・ルーラーの理解が間違っているかどうか、わたしはまだ何の判断も持っていないので、ご勘弁いただきたい」。

質問者 E（上に同じ）：

「『遊び』は、やはり、ホイジンガの影響か。なるほど、わたしもそう思う。あの時代、進歩的な文化人たちはみな、『遊び』という言葉を使った。しかし、うちの教会の中には、『遊び』とか『喜び』と言われると、途端に拒絶反応を起こす人々がいる。今までわれわ

れが信じてきた改革派神学とファン・ルーラーの神学が、どのように馴染むのか、馴染まないのか、今のところ、未知数であると感じている」。

関口：

「たしかに、ファン・ルーラーの『遊び』は、ホイジンガの影響抜きには語れないと思うが、使われている意味は違う、と思う。ホイジンガはオランダのメノナイト派の人だった。ファン・ルーラーは改革派。思想の根本が全然違う。同じ言葉を使っている、内容が違おうとわたしは理解している。ファン・ルーラーが『遊び』を語り始めたのは、すでに戦中から。これから申し上げることは、今のところ、何の調べもついておらず、それゆえ全く当てずっぽうなのだが、ファン・ルーラーの目に映るオランダの戦中から戦後にかけての状況の中に、『この世界の中で生きることに完全に絶望してしまっている人々』がいたのではないか。この世界を捨てて、この世界から逃げ出して、天国に、『あっちの世界』に行ってしまいたいと切望し、自殺を図ろうとする人々さえ見ていたのではないか。その人々を前にして、ファン・ルーラーは『この世界から逃げてはならない！』『この世界を喜んで受け入れ、引き受ける勇気を持ちなさい！』と訴えていたのではないか。この世を捨ててしまいたい人々に向かって、なんとかしてこの世の中に留まってもらいたいと願い、留まらせるための努力をしていたのではないか。要するに、現在<いのちの電話>の人々たちがやっているような仕事に通じることを考えていたのではないか、と感じている」。

(約30分)